

続々「子、親を選べず」その一



真之介君は

「そっかあ、したい事をやればええだけなんやあ」

と吹っ切れてから、自分が何をやりたいのか考えてみました。

考えると言うより、本当のことを言ったら馬鹿にされると、今まで心の奥深くにしまい込んでいた「やりたい事」を表に出してあげるだけで良い事は直ぐに分りました。

候補がないのではなく、何ものかに「忖度」して自ら取り下げているのです。

「恐竜の化石発掘調査隊。シルクロード探検隊。動物学者。発明家。皆やってみたいなあ。でも、どれも面白そうやから、困ってまうなあ」

真之介君はウキウキしながらお母さんのいる元の家を訪れました。

真之介君はお母さんのいる元の家に行っていたのです。

その日、真之介君はお母さんにとっても楽しい気分で行きたい事をやれば良いと、お父さんに言われたことや、具体的にやりたい、なりたいたいもののお話をしました。

すると、お母さんは

「なにそれ？何で「」エンジニアとか「」じゃないのよ？そんなのでご飯食べていけると思ってたの？」

思いがけずお母さんから冷や水をぶっかけられて、真之介君はショックを受けてしまいました。突然、しかも尤も身近な存在の片割れから、今まで無意識に忖度をしていた先の「世間」を見せつけられたからです。将に伏兵でした。

伏兵と感じたのは、同じ話をお父さんにした時の反応は

「ううーん。どれも甲乙付けがたいなあ。わしやったらシルクロードの探検やな。なんせ、

恐竜の化石発掘もセットでできるからなあ」

とノリノリだったので、よもやそんな「冷たい」反応が返ってくるとは夢にも思っていなかったからです。

そんな真之介君の心の動揺も知らず、お母さんは更に

「真ちゃんも、もう六年生なんだから、もうちょっと大人になってよ。そして一杯お金稼いで、お母さんに楽、させてよ」

といました。

「マンションもお父さんから貰ったんだし、他にもお金貰ったって言っていたのに、もうないの?」

「ないわよ」

「なんで?」

「一人分作るの、面倒だから外食ばかりになっちゃったし、女子会の旅行とかで、大分減っちゃったのよ。女は大変なの。いろいろお金がいるの。もう子供じゃないんだから、その位、分るでしょうに」

真之介君は、お父さんとお母さんは随分違うなあと改めて思いました。そうして

「良くもまあこんなんで、結婚したもんやなあ。なんで、結婚なんかしたんやろう?」と不思議に思いました。

そうして、お父さんとお母さんの間を行き来していると、ある時はお座敷船でのんびり、ある時は突然バイクでぶっ飛ばす、あまりのスピードの緩急に、時々立ち眩みの様なものを覚えるのでした。

「女の子にはモテたあが、結婚するのは、なんや、ヤやなあ」

真之介君はまだ小六の子供でしたが、それはとても率直な感想でした。

「真ちゃん、帰ったら、お母さん何か大変みたいだったよ、って言っというて。分った?」

「うん」

ふう〜っ、が本当の返事でした。